

A BRAND NEW CHAPTER @KOCHI  
TOSABUSHI

# とさぶし

No. 50  
Kochi  
再発見  
新発見

TAKE FREE

高知県は、ひとの大家県。  
高知家

第50号記念

これからも、

とさぶし



第50号  
記念

# これからも、 とさぶし!



平成25年の創刊からさまざまな高知の文化を発信し続け、今回で第50号を迎えた文化広報誌とさぶし。記念号の特集は、そんなどさぶしのこれまでを振り返りながら、これから歩むべき道を考えます。

# とさぶしのあゆみ

「目の前の人の中に豊かさがある」  
そんな思いが詰まった

とさぶしの変わらない使命

「文化は人にあり！」を掛け声に発行を続け、今号で50号を迎えた文化広報誌とさぶし。県庁職員や編集委員をはじめ、地元編集者やデザイナーたちが手を携えて、高知に根ざし受け継がれてきた唯一無二の文化を伝えてきた。地方から人口が、とり

わけ若者の割合が減少していく現代。今改めて「本当の豊かさ」が問い直される中で、高知で暮らす目の前の「人」の中にある確かな豊かさの発信を使命に、多くの人の協力のもと、創刊から12年にわたり発行を続けてきた。

平成から令和へ、時代の価値観がさらに変化



文化広報誌とさぶしの制作に関わる面々。前身となった「見えない文化が見える本 とさのかぜ」の精神も流れている。

していく中で人それぞれ「高知の豊かさ」を、高知で生き生きと暮らしている人々を通して再認識してほしい。そんな思いを込めて、この50号の節目に「これから、とさぶし！」を合言葉に、高知の文化を伝え続ける。

## とさぶし第1～49号までの特集一覧

<p>令和5年(2023年) <b>5</b></p> <p>第42号/牧野さんだいすき! 第43号/各駅停車で行こう 第44号/あまのお接待 第45号/自転車が似合う日々</p>	<p>令和3年(2021年) <b>3</b></p> <p>第34号/節句の記憶。 第35号/土佐のだし 第36号/仁淀川の人と暮らし 第37号/わが町の路面電車とさでん</p>	<p>令和元年(2019年) <b>1</b></p> <p>第26号/土佐茶の誇り 第27号/伝説の土佐珊瑚 第28号/文学の世界へ 第29号/土佐の名建築</p>	<p>平成29(2017年) <b>29</b></p> <p>第18号/宝の山 第19号/住を活かす 第20号/田舎ずしのルーツ 第21号/よさこい祭りは、冬、はじまる!</p>	<p>平成27(2015年) <b>27</b></p> <p>第10号/黒潮スピリッツ 第11号/8月の日曜市 第12号/山に咲くロマン 第13号/うつぼが町を救う?!</p>	<p>平成25(2013年) <b>25</b></p> <p>第1号/室戸から日が昇る 第2号/メタルの星 第3号/高知アイスクリン物語 第4号/船出のとき 第5号/血鉄</p>
<p>令和6年(2024年) <b>6</b></p> <p>第46号/高知人がつむぐ映画愛 第47号/情熱のフルーツ 第48号/夏のこと 第49号/お城が見守るまち</p>	<p>令和4年(2022年) <b>4</b></p> <p>第38号/あなたの暮らしに高知の花を 第39号/まんが王国・土佐 第40号/TOSAスパイスワールド 第41号/漁師のお仕事</p>	<p>令和2年(2020年) <b>2</b></p> <p>第30号/ご当地スポーツ 第31号/音楽の輪 第32号/土佐の酢みかん 第33号/着物を装う土佐の人々</p>	<p>平成30(2018年) <b>30</b></p> <p>第22号/プラスで挑む! 第23号/今話題のシェア文化 第24号/土佐和紙に恋して... 第25号/土佐酒入門</p>	<p>平成28(2016年) <b>28</b></p> <p>第14号/高知の地スーパー 第15号/高知の地芝居 第16号/食卓彩る さしすせそ 第17号/ぶらり くら鉄</p>	<p>平成26(2014年) <b>26</b></p> <p>第6号/高知の地パン 第7号/水辺のひとびと 第8号/高知のクラフト 第9号/香る土佐酒</p>

土佐の文化を巡るそれぞれの

# とさぶし体験

高知の文化や担い手たち取材してきたとさぶし。一方で自らは誌面に登場しないものの、とさぶしをつくる人、読む人、配布協力をする人など、とさぶしを支えてきた人たちにもそれぞれの「とさぶし体験」がある。

高知に生きる人々に息づく「これぞ、ぶし！」の感触を探して

とさぶし第1号の発行は、平成25年のこと。それから6年にわたり、第22号ま

でのとさぶしの編集やデザイン制作を手がけていたのが、高知市の出版社「南の風社」だ。高知の暮らしをコアな視点から描き出す編集スタイルや、若者が親しめるデザインで、発行される度に評判が上がる一方、同社の編集者である細迫さんは、「最初の3、4号くらいまでは、『これでいいんかい』までは、『これでいいんかい

ね」と迷いながら走った1号あたりわずか24ページの広報誌。「どのページも読み飛ばされないように」と、企画や編集、デザインを工夫した。「ただ常に譲らないようにしていたのは、『これぞ、土佐のぶし！』という感触。『ぶし』という響きに感じられる「無骨さ」や「しごとさ」、「こぶし」を握りたくなるような爽快な感情。そういうニュアンスや

方向性があるか、毎号確かめていました」。とさぶし第50号発行の今年は、偶然にも、細迫さんが高知に移り住んでちょうど50年を迎える節目の年。「僕たちがこれまで培ってきた『編集』という技術や表現が持つ力を、次の世代に伝えていきたい」と語ってくれた。



平成29年4月に窪川駅から宿毛駅まで走った「とさぶし列車」のイベントの様子。冊子を超えて文化と人をつないだ。



とさぶしで伝えた諦めない土佐の「気骨さ」

株式会社 南の風社 代表取締役

ほそきこ せつお  
細迫 節夫さん

細迫さんのおすすめの  
一冊



とさぶし 第1号  
(室戸から日が昇る)

「スタートは日の出ずる室戸の特集にしよう」と全力で取り組んだ必死感や、「文化ってなに?」「どう作ったらいいの?」と悩んだ戸惑い感がよく出ています。

## とさぶしをひとつのヒントに 地元の生活文化を伝えていく

調理師や保育士を目指す高校生の授業を受け持っている澤田さん。とさぶしを初めて手に取った場所は、生徒たちと郷土料理を学ぶために訪れた南国市の農家レストラン。それ以来、毎号のように読んでいるという。

「酢みかんや煮干しだしなど、高知らしい食材が種類豊富に載っている記事を見て、大好きになったんです。学校の調理実習でも、生徒たちと一緒にとさぶしをめ

澤田さんのおすすめの一冊



### とさぶし 第35号(土佐のだし)

高知で日常的に使われてきた、いろんなだしが載っていて、「こんなにあるんだ!」と驚きました。

高校生たちに触れてほしい  
思わず安心する地元の味

高知県立岡豊高等学校 家庭科教員

さわだ まさみ  
澤田 雅美さん

四国八十八ヶ所を巡るお遍路さんも通る土佐市高岡町で、ベーカリーカフェを営んでいる岩郷さん。店には地元住民はもちろん、近隣のホテルに宿泊した観光客やお遍路さんもモーニングを味わいにやってくるそう。5年ほど前からとさぶしの配布協力を行っており、特に県外からやってきた客と、とさぶしをぎっかけに「コミュニケーションが生まれているという。」「とさぶしに掲載されている場所に行ったこ

## とさぶしの配布をぎっかけに 地域の文化を知ってもらおう

とはありますか?』と聞かれて観光案内をすることも。お遍路や土佐市の記事が載っていたら、いつも以上に力を入れて配っていきたいです」。

岩郷さんのおすすめの一冊



### 第44号(あまいお接待)

札所へ足を運ぶお遍路さんがよくご来店されるので、遍路道中の甘味を紹介しているオススメの一冊です!

県外からやってきた人と  
とさぶしを通じて交流が生まれる

ベーカリーカフェ イワゴ 取締役

いわごう たかや  
岩郷 孝哉さん

## 取材の体験をきっかけに 土佐酒がさらに大好きに

まだ大学生だった当時、飯山さんはとさぶし第25号で酒造見学の取材に同行。もともと日本酒が大好きだったが、この取材経験が大学で学ぶ微生物学や発酵学に役立つなど、勉強にも深みを与えた。さらに北海道や関西にある食品メーカーの工場見学にも足を運び、地域に根づく「食の魅力」にはまっていたそう。卒業後は関東で食品商社に就職。現在は、日本各地の特徴ある食品の

販売企画に携わり、高知ゆかりの商品を扱うこともあるという。「とさぶしをきっかけに気づいた高知の魅力を同僚や友人によく話してますね。土佐酒については、特に自信满满で」と笑う。



飯山さんのおすすめの  
一冊

### とさぶし第25号 (土佐酒入門)

土佐酒が好きだったものの、知識はまだ浅かった当時、この特集で土佐酒の魅力の秘密がわかりました。

### 食品商社 勤務

いいやま ももか

飯山 桃樺さん

土佐酒は自信を持って

おすすめできる文化！



## 憧れのとさぶし 読者から届け手のひとりに

学生時代、帰省した高知で偶然見つけたとさぶしに衝撃を受けて以来、「ずつととさぶしに憧れてきた」と振り返るのは、現在の編集スタッフでもある今橋さん。仲間たちと文芸誌を手づくりするなど、もともと編集活動が好きだったこともあり、土佐酒や日曜市など、とさぶしをめぐる度に現れる新しい高知の姿にワクワクした。「もし高知に戻ったら、小さな記事ひとつだけでも携わってみたい」と

文化が受け継がれるとは  
情熱が伝わっていくこと！



今橋さんのおすすめの  
一冊

### とさぶし第39号 (まんが王国・土佐)

夢中になってまんがを描き続ける、土佐人たちの情熱に共感。自分のルーツを見つけた気がしました。

### 地元出版社 勤務

いまはし だいき

今橋 大輝さん

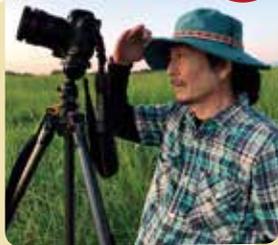
50人が語る

# わたしとさぶし

日頃からとさぶしを支えてくれている  
いろいろな人に聞いた「とさぶしのこと」。

50人からのメッセージ。

第1号  
で協力



また はくし  
**前田 博史さん**

高知市/60代/天然写真家  
初刊発行時の情報の多さと斬新な発信力に感動したのを覚えています。号を重ねてもその内容は衰えず、むしろパワーアップしているように思います。これからも県民の心を捉える高知の盛り上がりや、どんどん伝えてもらえると嬉しいです。

第47号の感想

とがし たいと  
**富樫 泰杜さん**

兵庫県/20代/読者  
歴史のあるものから最近栽培が始まったものまで、高知では多様な果物が育てられていることが分かりました。ぶしゅかんは漠然と「高知の柑橘」とだけ知っていましたが、記事を読んで味や食べ方・飲み方のイメージがわかりました。

こにしとおる

**小西 徹さん** 京都府/70代/レティシア書房

京都市内で書店を営んでいます。以前からとさぶしを設置しており、世代を問わず多くの方が手に取られています。その中で、「高知から京都へ出てきた方の話を聞きたい」という読者の声や寄せられたこともあり、とさぶしが高知と京都をつなぐ冊子になっていることを実感しました。



配布  
協力

ささき かな

**佐々木 加奈さん**

大阪府/50代/ヤマモモ生産者

掲載記事を見つけた県内外の友人達からたくさんの方の応援の声、また「商品に使ってみたい」という声もいただきました。父から引き継いだヤマモモの木を大切に守り育て、子どもたちや若い世代に「高知の初夏の特産品」であることを広く認知されるようにしたいです。

第48号の感想

いおりい けいこ  
**五百蔵 恵子さん**

高知市/40代/読者  
この夏に子どもが「とさぶ子タウン」に参加させていただいたので楽しく読ませていただきました。県史特集の資料調査のこと、養成講座のことも知ることができてよかったです。たくさん若い人が参加されており心強いなと思いました。

第16号  
で登場



あきよし たかお  
**秋吉 隆雄さん**

黒潮町/50代/イノタネアグリ  
とさぶし16号「食卓彩る さしすせそ」の「さ」で紹介して下さったのが懐かしく思います。その後、入野砂糖研究会に頼もしい若手も入りました。これからもとさぶしならではの高知の逸品を発信してほしいと思います。

第47号  
で登場



第47号の感想

初めてとさぶしと出会ったのは果物特集でした。高知には柚子をはじめ文旦や山北みかんといった柑橘だけじゃなくて、メロンやヤマモモなど高知の気候を生かした果物がたくさんあることにびっくり！まだまだ知らない高知の魅力を見つけてもっと広めていきたいです！



おおくぼ よしこ  
**大久保 耀子さん** 本山町/20代  
高知県青年団協議会会長 高知県観光大使

第31号  
他で協力



おかもと こうすけ  
**岡本 孝介さん**

佐川町/40代/grin design  
初めて目にした時「素敵なデザインだな」と感じたことを思い出します。その後高知へUターン。縁あって冊子のデザインに何回か関わらせていただくことになり、うれしさや驚き、同時に「高知へ帰ってきたがやなあ」とじんわりと感動しました。

第34号  
で登場



かんざわのりひろ

**神澤 識大さん**

仁淀川町/30代  
NIYODO ADVENTURE代表

掲載後は地元の方に「とさぶし読んだよ」と声をかけていただくこともありました。当時は事業を始めたばかりで妻と2人でしたが、その後一緒に働いてくれる仲間が増えたのは本当に良かったです。もっと一緒に働いてくれる仲間を作っていく、地域活性のお手伝いできたらと思います。

たなべ

**田辺 リカさん**

四万十市/50代/四万十漫画倶楽部

10年目を迎える「四万十漫画倶楽部」ですが、「描きたいを応援する」姿勢で、好きなものを描く環境と指導の提供を目指していきたいです。とさぶしは、文化広報誌という名にふさわしい素晴らしいものだと思います。これからも高知県の人や文化の魅力をたくさん取材してください。

第39号  
で登場



第32号で掲載  
直産市や物産展で  
この特集が  
活躍中!



とさぶし第32号  
(土佐の酢みかん)

果汁の酸味や果皮の香りを楽しむ  
柑橘類を「酢みかん」と呼ぶ  
食文化を特集。



## 「土佐の酢みかん文化」が進化している!?

「とさぶしの取材後も、高知の柑橘は盛り上がりつつあります!」と教えてくれたのは、当時取材を受けてくれた百田さん。とさぶしに掲載された「土佐の酢みかんカタログ」の特集は、その後、県内各地の道の駅や直産市で掲示されたり、都市部で行われる物産展で活用されたりと、高知の柑橘カルチャーの拡大に「役買っている。さらに百田さんいわく、若い世代の間で柑橘の話題が増えているそう。例えば、学生でありながら、園主として『フィンガーライム』の栽培に取り組む高校生がいたり、県立高知農業高校では、放送部が「土佐の酢みかん文化」をテーマに全国総文

祭に出場したり、県立幡多農業高校では「四万十ぶしゆかん」の普及活動が行われていたり、土佐の酢みかん文化はますます進化している。こうした盛り上がりは、さらに「守り残していくこと」にもつながる。「生きた文化財」といえる在来柑橘がカタログにできるほどたくさんあるのは高知県の大きな特徴。各家庭の酢みかんの使い方なども後世に残したい」と意気込む。

「とさぶしの取材後も、高知の柑橘は盛り上がりつつあります!」と教えてくれたのは、当時取材を受けてくれた百田さん。とさぶしに掲載された「土佐の酢みかんカタログ」の特集は、その後、県内各地の道の駅や直産市で掲示されたり、都市部で行われる物産展で活用されたりと、高知の柑橘カルチャーの拡大に「役買っている。さらに百田さんいわく、若い世代の間で柑橘の話題が増えているそう。例えば、学生でありながら、園主として『フィンガーライム』の栽培に取り組む高校生がいたり、県立高知農業高校では、放送部が「土佐の酢みかん文化」をテーマに全国総文



百田さんが作成した「カンキツ品種の来歴パネル」。安田町の「ゆずロードミュージアム」で展示されている。

柑橘の研究は日進月歩しています! 高知の在来柑橘を守り食文化の継承活動を続けていきます。

薬膳・和食文化研究家

ももたみち  
百田 美知さん

香美市在住。「和食文化国民会議」をはじめ、県内外のさまざまな場所で和食文化の継承に努める。



# 話題になった とさぶしの アし、

とさぶしで再発見・新発見して話題になった高知の文化のアレコレは、その後どんな展開が生まれている? 再取材・新取材を行い、それぞれの今をお聞きしました。

# 「最後の住民」が集落をにぎやかにしている!!

いまどうなっちゆう!?



次なる目標は椿山に「花の名所」を作ること。桜やハナモモを植えて、未来の草花公園づくりに励む。

「最後の住民が去った」と聞き、仁淀川町椿山（つばやま）地区にUターンした中内さんを取材したのは、とさぶし第36号のこと。「椿山を離れて暮らす方々がいつでも故郷に戻って来られるようにしたい」と語った中内さんの思いに、とさぶし読者だけでなく、多くのメディアを通じて共感を呼んだ。そんな中内さんは取材から4年近くが過ぎた今も、愛犬ラッシュと共に椿山にいと聞き、訪ねてみた。「畑仕事に、はちみつの仕事に、昔と同じ暮らしをしていますよ」と振り返りながらも、とさぶし掲載後は、テ

りぐった(※)ものは何もない小さな山里ですが、それが椿山の「えいとこ」だと思っています。

なかうち けんいち

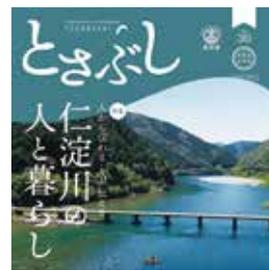
## 中内 健一さん

仁淀川町椿山地区で生まれ育つ。高校進学を機に離れた椿山に、令和2年にUターンした。



レビやYouTubeの取材が来るといった反響があったことや、なんと新たな住民が椿山に加わったことなどをうれしそうに報告してくれた。令和6年には、およそ30年ぶりに地元の神祭も復活。伝統の太鼓踊りや神楽も披露され、椿山を訪れた多くの人でにぎわう光景に「昔の椿山が戻ってきたようで本当にうれしかった」と胸の内を語ってくれた。

第36号で掲載  
1人で集落を守る姿に  
たくさんの共感が!



とさぶし第36号  
(仁淀川の人と暮らし)

仁淀川の暮らしが時代とともにどう移り変わってきたのかを、そこに暮らす人を通じて紹介。

第9号・第25号で掲載  
とさぶしで  
唯一2回特集が  
組まれたテーマ!



とさぶし第9号(香る土佐酒)  
とさぶし第25号(土佐酒入門)

第9号では土佐酒の「香り」の特徴を、第25号では国内外で土佐酒が「モテる」秘訣を取材。第9号に掲載された「高知酵母で土佐酒を分類した図」(右)も大きな反響を生んだ。



## 高知が誇る土佐酒が世界中で受賞ラッシュ!



令和6年も国内外で受賞ラッシュに湧いた土佐酒。7月には受賞したお酒を集めた試飲会も開催された。

とさぶしで唯一、2回特集が組まれた「土佐酒」が、さらにその勢いを増している。令和6年には、国内外で開催された16のコンテストでなんと103個ものメダルを獲得。とりわけ「2024年度全米日本酒歓評会」では、金賞率・金賞数共に「土佐酒が第1位」という大快挙を成し遂げた。その背景には、過去の特集でも詳しく迫ってきたように、県全体で「技をなかにまにする(※)酒造り」という土佐酒の酒蔵ならではの文化がある。同年夏には「川澤酒造」(いの町)も新たに仲間入りし、県内全19蔵が一丸となって「もっとう



食・酒・人・宴は、高知が誇る最大の魅力!さらに多くの人に体感していただけたらうれしいですね。

高知県酒造組合 理事長

たけむら あきひこ  
竹村 昭彦さん

佐川町生まれ。司牡丹酒造株式会社で代表取締役社長を務める。郷土愛にあふれ、さまざまな土佐の文化に精通。

まい酒を」という情熱を燃やしている。高知県酒造組合の竹村理事長は、「日本の『伝統的な酒造り』がユネスコ無形文化遺産に登録されたタイミングで、高知のお酒のレベルが日本一高いことが証明されたんです。土佐の食や人といった文化と一緒に、土佐酒を発信していくねば!」と力強く話してくれました。※共有する、シェアする

第13号で掲載  
とさぶし  
ウェブ記事で  
閲覧数  
ナンバーワン!

とさぶし第13号(うつぼが町を救う?!)

須崎市のうつぼを巡るディープな特集。うつぼはさばき  
方次第で食感や味わいに大きな違いが生まれるという。



## 須崎のうつぼ職人が 後継者を募集している!?

グロテスクな顔つきの「うつぼ」は、今やれっきとした高知の郷土料理のひとつ。とさぶし第13号では、そのさばき方を「うつぼ解体新書」として紹介。「こんなに人気になるとは

思わなかった」と語るのは、当時取材に協力してくれた細川さん。数あ

る魚の中でもさばくのが難しいとされているうつぼだが、細川さんは現在も加工職人のひとりとして活躍。居酒屋などでタタキや唐揚げといった料理で提供されるうつぼをさばいていく。職人の高齢化が進み、後継者について考える昨今。「少しでも興味がある人は、ぜひ門を叩いてほしい」と話す。

うつぼ料理は高知の大切な食文化。魅力の発信に協力し続けていきたいです。

うつぼ職人

ほそかわ くに お

細川 国男さん

岐阜県生まれ。須崎市に移住し漁師、そして居酒屋を続ける中、数々のうつぼ料理を考案。

## 郷土料理のレシピが 移住促進に一役買っている!

県内各地に伝わる旬の郷土料理を簡単なレシピと共に紹介し話題になった連載企画「土佐おたからレシピ」。「第40号の『ナスのタタキ』を読んで、郷土料理の教室をやったんですよ」と教えてくれたのは、移住促進の仕事に携わる門田さん。田舎暮らしを体験しに県外からやってきた参加者の交流会で、ナスの

名産地である安芸地域に住むお母さんたちによる料理教室を開催。ナスのタタキ作りで距離がぐっと近づいたそう。「食は高知の大きな魅力のひとつ。これからも交流の場をつくっていきま



第35~46号で掲載  
土佐おたからレシピが  
郷土料理継承の  
参考資料に!

安芸地域の家庭ならではのアレンジも加えたナスのタタキ作り。地元の歴史からオススメの喫茶店まで、話題が広がったそう。「家に帰ってからも作ってみたい」という声も。

とさぶしは高知をアピールするためのネタ帳。地元住民でも知らない魅力が詰まっていますね!

高知県 移住促進課

かどた みつひろ

門田 充博さん

高知市生まれ。高知県へのU・ターンを盛り上げるため、移住促進に関する事業に携わっている。



第41号で掲載  
サラリーマン漁師が  
ますます注目を  
集めている!

### とさぶし第41号(漁師のお仕事)

県内の漁師たちを訪ね、漁業の今を取材。「漁師になりたい若者を呼び込むには、給与や休暇を安定して取れることが重要」と山本さん。



サラリーマン漁師の働き方が  
全国から若者を呼んでいる!

「とさぶし」に載ってからよ。テレビ局も週刊誌も取材に「来たきねー」と豪快に笑うのは、以前「サラリーマン漁師」の取材に応じてくれた山本さん。実はこの人、これまでとさぶしを最も配った

(!?)方。就職フェアや学校訪問に第41号(上記)を携えて、配布した数は

なんと200冊以上!「全国で漁師が減りゆうぎ。高知の漁業が続くかは若者がどれだけ知ってくれるかよ」と言う。サラリーマン漁師であれば安定した働き方ができることから、昨年若者が就職し、中には沖縄県石垣島の出身者もあるそう。山本さんは「若者を高知の漁師に!」とますます意気込んでいる。

サラリーマン漁師はお昼には仕事も終わるき、案外若者に向いちゃうで!

三津大数株式会社 事務長

やまもと こうせい  
山本 幸生さん

室戸市生まれ。地元の定置網漁の現場で「サラリーマン漁師」という働き方を提案し、リクルート活動に取り組む。



## 長宗我部元親のファンが ぞくぞくと増えている!

戦国時代の土佐の英雄、長宗我部元親。その勇姿を柔らかなタッチでコミカルに描いた漫画「戦国元親くん」は、かつてとさぶしで連載されていた人気作品で、平成27年には単行本としても発行。現在も読者から注文があるという。「その本は当時、当館でも販売していたんですよ!」と懐かしそうに話すのは、高知県立

歴史民俗資料館の岩本さん。「元親は戦国武将ながら文化的な一面もあって、いろいろな才能を持っていた人物。今後もまんがやゲームのモデルになって、若い人に元親の魅力がどんどん伝わってほしいですし、実像ももっと知ってもらいたいですね!」



第1~10号で掲載  
長宗我部元親の  
連載まんがに  
反響が!

戦国時代や長宗我部元親を詳しく知らない人でも、可愛いまんがを通じて、元親の志や当時の土佐の人々の生活に触れることができる。

当館に立つ元親の像もイケメンと評判なので、ぜひ会いに来てください!

高知県立歴史民俗資料館 総務事業課

いわもと さよ  
岩本 佐代さん

大阪府生まれ。事務やイベントの開催などに従事している。



50人が語る

# わたしとさぶし

第48号  
で協力



とさぶしを通じて、高知県内の子どもたちに「高知ユナイテッド」という存在を身近に感じてほしいと思います。そして、県内の子どもたちがサッカーに興味を持ち、サッカーを始めるきっかけになればうれしいです。Jリーグに入ったことで試合を見る機会が増えると思います。ぜひ会場を訪れて試合の雰囲気や楽しさを楽しんでほしいです。

高知市/20代/高知ユナイテッドSC  
竹内航輝さん

高知市/30代/カメラマン  
ごま塩さん

県内たぐさんの商店街にお邪魔させてもらって、また行きたい場所、会いたい人が増えました。高知の文化は本当に深くさまで、毎年知らないことに出会っている感覚！まだまだ知らない高知を体感して、高知県民としてアップデートしていきたいですね！

第32号  
で協力



高知市/tomoniflower  
橋田智彰さん

「高知の花」特集の取材後、携わる方々とより結束が深まりました。そして高知の花を贈る機会の創出につながるPR活動をお客様をはじめ周りの方から応援、支援していただけることが少しずつ増えました。これからの毎日を丁寧に過ごさ、共に彩りある日々を積み重ねていきたいです。

連載の  
撮影



第38号  
で登場



第35号  
で登場



南国市/70代  
RKC調理製菓専門学校 常任顧問  
三谷英子さん

取材して下さったことが励みとなり、諦めることなく食文化の継承に取り組むことができます。とさぶしは、高知の食文化を学ぶ者としては、実に心強い味方です。信頼できる資料として、いつも手元に置いて重宝しています。

配布  
協力



高知市/30代/そばと酒肴月  
まつぎ みき  
松木未来さん

いつも楽しいテーマで、興味深く読んでいます。とさぶしは、日本酒や食材をテーマに説明するときの資料として使っています。

よりみつさかえ  
より光栄さん

お接待の特集で「松本大師堂」を取り上げていただきありがとうございます。とても励みになりました。暖かくなってきたので春のお遍路さんも増えていきます。これからもたくさんのお会いを楽しみにお待ちしております。

第44号  
で登場



高知市  
とさわし  
土佐和紙プロダクトのみなさん

高知の文化や歴史を、多くの人に伝えてくださることに感謝しています。「記事を読んだよ」と声をかけてもらい、和紙の魅力を再認識するきっかけになりました。これからも、現代の暮らしになじむ和紙製品を作り、より多くの方に手に取っていただけるよう取り組んでいきたいです。

第24号  
で登場



高知市/80代/布工房めろでい〜  
くわな まき  
桑名真紀さん

とさぶしは、土佐の人間でも知らないような土佐の文化を知るきっかけとなっていて感心しました。そんなとさぶしに取り上げていただき光栄でした。取材後は、襟を正す思いとなり、着物のことを認められたと感じました。また、着物のリフォームの理解度が上がったように思います。

第33号  
で登場



第29号  
で登場

高知市/40代/建築家  
やまもと なおこ  
山本直子さん

土佐市「つな一で」が完成した直後だったので、プライムトーク、ラジオ出演で自分の仕事を振り返ることができました。仕事に集中すると、全体が見えにくくなるのですが、取材を受けたことで自分がやってきたこと、やりたいと思っていることを再認識する機会となりました。



第48号の感想

高知市/20代/読者  
なかた もも  
中田桃さん  
高知のアンテナショップで見つけて誌面を読みました。読み応えがあり、高知にまた遊びに行きたいと思う内容でした。地元のお嬢に帰るときに高知にも併せて遊びに行こうと思います！

第23号  
で登場



高知市/40代/かつおゲストハウス  
ゲストハウスに宿泊される県外のお客様に、とさぶしを見せながら高知観光をアテンドすることがあります。デザインもサイズ感もかわい、情報も新しくユニーク！高知ファンが増えるよう、私も高知の観光案内頑張るぞー！

安澤真希さん

高知市/30代  
高知放送アナウンサー  
たかはしりゅうすけ  
高橋龍介さん

高知のいろいろな情報を発信する立場ですが、とさぶしを読んで高知の魅力を新発見・再認識させてもらっています。とさぶしの「と」=とにかく高知愛にあふれ、「さ」=サクッと読める見やすさで、「ぶ」=文化や歴史も学べ、「し」=知らない人はいない文化広報誌です！



※清酒と同じ方法で造った醪(もろみ)の、滓(かす)をこさないままの、白く濁った酒。

とさぶし編集委員の2人と共に、ついにやってきた三原村。高知県の南西部にある、小高い台地に広がる農山村で、道沿いには米を育てる田地が続く。そんな三原村の代名詞といえば、もちろんどぶろく(※)。「土佐三原どぶろく合同会社」の東久美(ひがしくみ)さんは、「どぶろくは1本で3つの楽しみ方があるお酒。まずは上澄みをスズットと、次は優しく振り混ぜて、最後は瓶の底に溜まった澱(おり)を全力でシェイク」と話してくれた。どぶろくシェイクは、三原村の宴会でお決まりの光景。どぶろくの澱がとろりとなるまで振りきるのだとか。



# 三原村を 再発見! 新発見!

足を運んで話を聞いて  
見えてきた三原村

三原村のいろいろな場所へ行ってきました!

土佐硯加工製作所



硯の原料となる石が採れるのは、三原村の下切(したぎり)地区にある「伊崎畑山」。鑿(のみ)を使いこなせるまでに3年がかかるといふ。



三原村で生産されている「土佐硯」は墨のおりがよい(※)と評判。同じ石から作られた硯でも、職人それぞれの個性が出るという。※墨がよい具合にすればこと

みはらのじまんや



地元の人も「これは絶品!」と太鼓判を押す、手作りこんにゃくや、新鮮な野菜などをお買い上げ♪



やまびこカフェ

平日は地元のお母さん方が交代でその日のメニューを決めるそう。土曜はビザDAY!

今まで一度も取材に来てなくて  
~ごめんちや~

第50号に至るまで、なんと一度も三原村を取材で訪れていなかったとさぶし。「まっこと、ごめんちや」という思いも込めて、とさぶし編集委員の2人と共に三原村を訪ねた。

豊かな水資源に恵まれた米どころ・三原村の米。「やまびこ米」や「水源のしずく」といったブランド米もある。



やまびこカフェ

SNSで写真や動画を使って地域の魅力を発信しています。その中で三原村も訪れたことはありましたが、地元の方からお話を聞くと感じられる魅力が段違いでした!

とさぶし編集委員

みたに しんべい  
三谷 真平さん

地域づくりのお手伝いで県内各地に行っていますが、三原村は初訪問。人・もの・コトの魅力がたくさん発見できました。

はたけなか ともこ  
畠中 智子さん

## 村の自慢話に

### 垣間見える

### 温かい村の雰囲気



「米の収穫期には、村の田園風景が一面、黄金色になるがやけん」と、「(一社)三原村集落活動センターやまびこ」の池上茂孝(いけのうえしげたか)さん。三原村を取材で巡ると、どぶ

ろくだけでなく、土佐硯(とさすずり)や茶葉、豆腐作りなど、これまで大切に紡がれてきた産品や文化を次世代の担い手たちが継承し、「三原村の自慢を絶やすまい」と踏ん張る様子も印象的だった。令和6年には、三原の米を使用した甘酒も新たに誕生。

おしゃれなパック  
ケージデザイン



にもこだわり、若者向けのフアッション雑誌にも取り上げられた。三原村役場の田野利佳(たのりか)さんは、「三原村の醍醐味は、農家民宿のおかみさんが話してくれる、地元のディープな笑話。最高に面白いので、ぜひ泊まりに来てください」と笑う。今後ともさびしで、ぜひとも取材させてもらいたい。



### 星ヶ丘公園



絶滅危惧種のヒメノボタンが見られるのは9月頃。わずか2人で管理しながらも、1年を通して自然の草花を間近で見ることができる。

### 岩崎製茶



一番人気の「玄米茶」はふるさと納税の返礼品としても評判とのこと。「今後はオンライン販売も始めたい」と話す。



4代目・岩崎剛(いわさきつよし)さん(右)。父・和夫(かずお)さんと共に二人三脚で、三原村で唯一の茶園を経営。

### 宮川豆腐店



豆腐に使用するのは国産大豆と室戸のながり。凝固剤を一切使用していないことから、大豆の濃厚な風味が立っている。



代表の宮川大毅(みやがわだいき)さん。祖母に豆腐の作り方を習い、試行錯誤しているうちに、すっかり豆腐作りにハマったという。

### 土佐三原どぶろく合同会社



敷地内にある工場では、農家民宿のおかみさんたちがどぶろくを手作りする様子も見学できる。見学と飲み比べのセットは令和7年4月から「龍馬パスポート」の体験メニューに採用される。

「あのこ」「このこ」「みはらのこ」の3種のどぶろくを飲み比べ。まずは香りを楽しむ。宴会でどぶろく片手に「あのこが好き」「このこがいい」と楽しむ姿が目に見え、この名前が付いたそう。

# 高知の編集者ならではの目線で そこにある魅力を発見する、発信する。

好きなんです。でも、データで見ると高知っているいろんな課題も山積みだから、地域課題の解決に編集という仕事で取り組みたくて」と話す。かずさんは、地元タウン誌のインターンや広島県の出版社を経て、平成30年に高知にUターンした。

## それぞれの場所で 見つめているもの 編集を巡る対話

話題が「編集すること」に移ると、かずさんは、「編集って『伝えるべきものの本質がどこにあるのか』を考え抜くことだと思う。その上で、デザインなどの工夫で、本を手にとった時、SNSで目に留まった時に、

『これなに？面白いな』って、思ってもらえるものをたくさん生み出したい」。

全国販売される商業誌を長年手がけてきた黒笹さんは、「編集者の醍醐味は、世の中の兆しをいち早く察知すること。誰よりも先にそれに気づいて、コンテンツに落とし込んでいくことなんです」と言う。

では、日本の社会や時代はこれからどこに向かうのか。黒笹さんがその「兆し」を見つけたのは、まさに高知だった。「高知って、都会と比べたらお金はないかもしれないけれど、全然貧乏臭くない。これって高知で暮らす人たちは、楽しく生活していく技術が優れているからだと思っ

黒笹さんの印象に残っている「とさぶし第42号(牧野さんだいき!)」。表紙は、黒笹さんの協力を受けて、漫画家の村上もとかさんが手がけた。



は思うんです。そんな『生活技術』こそ、これからの日本の新しい価値観だと思うので、高知の優れているところとして全国に向けてどんどん発信していきたい。かずさんも、「確かに高知の魅力は、人の柄の明るさとか、暮らしの価値観とか、目に

は見えないものにこそある。自分たちの魅力や文化を、高知に暮らす人たちが自身で意識できるようにしたら、さらに若い人たちにも伝わっていくのでは」とうなずいた。

## 第50号を迎えた とさぶしの振り返り これからへの期待

これまでのとさぶしを振り返りながら、かずさんは、「川や流域に関する企画や記事の仕事に今携わっていることもあって、とさぶし第36号(仁淀川の人と暮らし)に目を通すことがあるんです。そんなふうに、読者の方が自分の興味に応じて、気になる特集のとさぶしを手にとってもらえたらいいですね。それぞれの興味をきっかけに、20、30代に高知の文化を面白がってもらいたい。これに対して、『僕が思うのは



ね」と黒笹さん。「今、日本には元気がなくなっている人が増えているように



見える。でも高知はまさに、訪れると元気になれる場所! 『元気になって、よかったですね。よかったらその

まま住んでください。でも、元いた場所に戻っても、もちろんいいですよ』って、笑いながら言ってくれるような、大きくて温かい懐が高知にはある。僕はそれこそが高知の一番の底力だと実感しているの、そんな優しさをとさぶしで伝えていきたいな」。

高知に來ると元氣になれる。目には見えない文化の中にも、そんな高知の魅力が詰まっている。



エフエム高知で毎週金曜日に放送中の「プライムトーク」に出演した時の黒笹さんとかずさん。二人の出演回は、令和7年4月4日、11日の2週にわたってオンエア。



# プライムトーク

第50号を記念して  
コーナーが復活!

とさぶし第23号から第46号まで掲載された連載企画「プライムトーク」が、第50号を記念して復活!  
とさぶし編集委員を務める2人が地元のラジオ局「エフエム高知」で語り合った。

GUEST

南国生活技術研究所 代表

くろささ やすし

黒笹 慈幾さん

昭和25年、東京都生まれ。株式会社小学館に入社し、アウトドア雑誌「BE-PAL」の編集長などを務める。「釣りバカ日誌」の主人公「浜崎伝助(通称ハマちゃん)」のモデルとしても有名。

GUEST

閃光社

かずさ まりやさん

平成6年、高知市生まれ。フリーランスの編集者・カメラマンとして活動。高知のインスタマガジン「chuu!(ちゅう)」の運営をはじめ、「日曜市の歩き方マップ」なども発行。

高知にしかない価値を  
それぞれに見つけた  
2人の「編集者」

とさぶしの発行に向けて、「どんな特集を展開するべきか」などが話し合われる編集会議に、とさぶし編集委員として参加している黒笹さんとかずささん。年齢も経歴も異なる2人に共通するのは、「高知の編集者」という視点。「とさぶしは高知の文化をどんなふうに伝えていくべきだろう」といった編集を巡るテーマをはじめ、それぞれが見つけている「高知ならではの価値」を、今回、エフエム高知のラジオスタジオで語り合った。

大手出版社でさまざまな雑誌の編集長を務めた黒笹さんが高知に移り住んだのは、平成24年のこと。「東京湾で釣りをしていたらボートのエンジンが壊れて、そのまま高知まで流されちゃった(笑)」と冗談まじりに話すほど、大の釣り好き。「川に、磯に、沖に。釣り好きにはたまらない環境」と高知に惚れ込んだという。一方、高知市で生まれ育ったかずささんは、「幼い頃、祖父のバイクに乗せられてよく山の中を走っていたので、ずっと高知の自然が

50人が語る

# わたしとさぶし

たなか さゆり  
**田中 沙由里さん**  
香川県/30代  
まちのシューレ963  
ギャラリストスタッフ

毎号楽しみに待たれている方がいらっしゃる人気のとさぶし。気が付けば配り終えていることがほとんどです。シューレにとつとさぶしは高知と香川の架け橋のような存在です。これからも発行を楽しみにしております。



配布協力

第23号  
登場



トマリギ ホステル

**TOMARIGI HOSTEL  
の皆さん** 高知市

とさぶし創刊50号記念、おめでとうございませう！地域の魅力を発信し続ける姿勢に、いつも励まされています。「とまり木ホステル」を取り上げていただいたご縁に感謝し、今後のさらなるご発展を心よりお祈り申し上げます。

きだ ともあき  
**鬼田 知明さん**  
高知市/鬼田酒店

とさぶし第25号に掲載いただき、早くも50号。掲載当時、県内に18蔵あった酒蔵は2024年には19蔵に増えて、高知の酒造りは益々盛り上がっています！皆様も一緒にもっともっと盛り上げていきましょう！



第25号  
登場

## 第41号の感想

はねだ ゆかり  
**羽田 愉加利さん** 室戸市/40代/読者

いつも楽しみにしています。今回は、室戸の知っている方も何人か載っていたので、とてもうれしかったです。私自身も加工食品を作っているのでもっと知ってもらえたらうれしいです。

よしもとしゅん  
**吉本 駿さん**  
徳島県/20代/大学生

現在、大学生になり地元高知を離れ県外で学生生活を送っているため、実家の牛乳が飲めず少し寂しい気持ちになります。吉本牛乳は生まれてから毎日のように飲んでいたので他の牛乳を飲んでも物足りなさを感じています。僕にとって家庭の味といえ「吉本牛乳」です。

第6号  
登場



第31号  
登場



なかやま ゆうしろう  
**中山 湧士郎さん**  
佐川町/20代

第44号の表紙でお遍路役をさせていただきました。働いている地元の児童施設で子どもや職員さんが表紙を見つけて、みんなが驚いてくれたことは良い思い出です。

ちよたに まさき  
**千代谷 正貴さん**  
兵庫県/40代  
THE NATURALKILLERS

とさぶしは内容はもちろん、表紙の表現力がとても素敵です。魅力あふれる高知を、さまざまな角度から見せてくれます。大好きな高知をさらに好きにさせてくれます(笑)。これからも高知に通い続けます！



第44号  
登場

かただ だいすけ  
**堅田 大輔さん**  
須崎市  
BOKKENT(ボッケン)元代表

当時は「まさか取材されるとは！」と思いながら、自分たちの活動や雪割桜をよりたくさんの方に知ってもらえることに気がきました。取材を通じて活動の重要性や地域社会への貢献を再認識することができたこと、活動を知っていただける機会を得たことに感謝しています。

第13号  
第33号  
登場



もりた じゅん  
**森田 潤さん**  
高知市/50代/森田ネーム

ネーム刺繍の仕事を知ってもらえてよかったです。当時まだ小さかった子どもの持ち物などに刺繍することで、価値を高められることに気がきました。名前を刺繍することで、モノを大切にしている気持ちと自分を大事にする心を知ってもらえるようにこれからも仕事を続けていきたいです。

第4号  
登場



配布協力



はまだ まさし  
**濱田 真史さん**  
高知市/30代

オリックスレンタカー高知空港店  
とさぶしは高知の魅力が詰まっており、レンタカーを利用されるお客様にとっても喜ばれています。観光に来られるお客様にとって高知の情報は必要なため、これからも高知の魅力を発信し続けてほしいと思います。



オンデザイン  
**ondesignさん** 連載企画  
で協力

香南市/40代  
高知の歴史を学び、高知の未来を知ることで、高知の今が感じられる唯一無二の冊子だと思います。これからも発行を楽しみにしております。

### 第49号の感想

もりいけ すずね  
**森池 鈴音さん**

高知市/20代/読者

安芸によく行くのですが、安芸城のことはよく知らなかったのが改めて知るきっかけになりました。普段は歴史についてあまり考えることがないので、こういった特集は勉強になります。県外出身なのですが、高知県はまだ魅力がたくさんありそうで、楽しいです。

つぼうち まさみ  
**坪内 政美さん**

香川県/50代/スーツの鉄道カメラマン

高知は鉄道ファンなら一度は行ってみたい県のひとつ！四国縦断路線土讃線、四万十川を車窓から独り占める予土線、太平洋の絶景を堪能できる土佐くろしお鉄道、これぞ路面電車の決定版といえようとかでん交通。秘境駅・廃線跡・保存鉄道・駅弁・駅スタンプ…。鉄道の魅力満載の土佐の国をぜひ特集して！

第43号  
で協力



### 第49号の感想

たかはし りさ  
**高橋 里紗さん** 埼玉県/30代/読者

「喫茶デポー」にモーニングを食べに行った時、レジ横に設置してあった表紙が気になって手に取りました。第49号のお城特集も面白かったです。ちょうど高知城に行った後で「そうなんだ！」と驚くことやうなずけることも多く、新鮮な気持ちで楽しみました。また出かけた先で見つけたら、手に取りたいなと思います。

第3号  
で登場

たけなか かなこ  
**竹中 佳生子さん**

須崎市/40代  
丸共味噌醤油醸造場

第3号の「せがーる」特集で載せていただいたのが、須崎へUターンして8年目のこと。それから「須崎特集」ともいえる第13号にも山ほどネタを書いていたけど…。高知愛を共に育んだ感、育ててもらっている感があります！これからも高知の文化をヨキに醸(かも)してください！



くすのせ しょういち  
**楠瀬 昭一さん**

高知市/50代/メガネのクスノセ

とさぶしの取材は、メガネを取り扱う自身の仕事について考える機会になりました。自分の仕事に責任を持ち、持続することの難しさを感じています。地域の皆さんの役に立てる仕事ができるよう、お客様と向き合い、メガネを楽しんでいただきたいと思います。

第11号  
で登場



第46号  
で登場

こまつ しゅうきち  
**小松 秀吉さん**

安田町/70代/大心劇場支配人

劇場横の喫茶に置いてあるとさぶしを見て、映画館に興味を持ってくれた方が多くいました。周辺の地域について話をしたりと、映画館だけでなく、地域の魅力を発信するきっかけにもなりました。

ミトネ デザイン

**mitone design. の皆さん**

馬路村/読者

いつも高知の文化や魅力を発信して下さり、ありがとうございます！私たちも、デザインを通して地域の魅力を、たまきかたまに通る馬路村の山奥のオフィスから発信していきたいと思っています。



第8号  
で登場

**かわむらひとみさん**

須崎市/40代/川村雑貨店

とさぶし創刊号から毎号お店に届けてもらい、高知の魅力ある場所や人などをとさぶしを通して知ることができました。第8号ではお店をご紹介いただきつなごうれしいご縁もあります。これからも、手にされた県内外の方に高知をもっと好きになってもらえるようなとさぶしを楽しみにしております。



川村雑貨店

### 第47号の感想

さかい ふみか  
**酒井 文香さん** 東京都/20代/読者

表紙のデザインがおしゃれで魅力的で、思わず手に取りたくなるリーフレットでした。中身も充実していて読み応えがあり、高知在住の80歳の祖母も楽しそうに読んでおりました。

### 第49号の感想

うらの なおみ  
**浦野 奈緒美さん**

大阪府/30代/読者

フリーペーパーでも内容が充実しており、高知出身の自分も知らなかった情報が多く、大変興味深かったです。第49号「城下町の歩き方」を読んで、帰省時に散歩したいなと思いました。

やまおか みわ  
**山岡 美和さん**

高知市/40代/土佐せれくとしよぶてんこす

当店のオープンの頃から、とさぶしを置かせていただいております。お客様からは「この冊子、とてもよくできていますね」と言われることがあります。「高知の良い情報をきちんと読みやすく、楽しくなるように」という作り手の想いが伝わるとても良い冊子だと思います。

配布  
協力



特集  
で協力



おがわ みわ  
**小川 美和さん**

高知市/40代/OM Design Works

とさぶしの情報量の多さや、新しい高知の魅力を発信する姿勢にはいつも驚かされています。これからも高知の自然や人、文化の魅力を斬新な切り口で紹介してもらえることを楽しみにしています。

はまだ  
**浜田 ともこさん**

高知市/30代/かしこ

いつも空き時間にゆっくり拝読しております。「とさぶしを見たよ」とご来店いただいたお客様の中には、今ではかしこでとさぶしを持って帰るのが習慣になっている方も。たくさん置いているのに、いつの間にかなくなっている、そんなとさぶしはお客様とのコミュニケーションにも一役買っています。

配布  
協力



何気ない日常を書き留めた  
日記エッセイ



描き感じる文化の兆しを追いかける！

はと は さ  
じと は っ  
めるで じ ま っ  
！ ま る と

50号から  
はじまる  
新連載！

制作した物を引っ提げて各地のブックイベントに



こむら あいり  
**古村 藍里さん**  
@kochi\_arukikata

平成6年、兵庫県出身。結婚を機に高知に移住。新聞社での勤務経験があり、取材が好き。古村さんのブログ「note」では、本棚を通してその持ち主の暮らしや生き方をひもたく連載「#うちんくの本棚」も始まっている。

「気づいたことや感じたことを記録することが私の習慣で。高知に居ると、例えば、文旦に塩をつけて食べるとか、『コレは記録しなきゃ！』っていう驚きがたくさんある」。そう話す古村さんは、それぞれが自由なスタイルで制作する「ZINE（ジン）」という出版物に刺激を受け、高知での日々をつづった印刷物「#高知の歩き方」を制作。日曜市に並ぶ野菜など高知の暮らしに触れた時に、古村さんの頭の中で起こった一瞬の出来事たち。「その時の自分にしか書けないものを書きたい。高知はそんな瞬間をたくさんくれる場所だと思う」。いろいろな高知を書きながら、多くの人とZINEで交流したいと、目を輝かせている。

移住者の目線から見える  
新鮮な高知の景色



次号の特集は…  
**道の駅!**

人生に節目があるように、  
世の流れにも節があります。

これまで地域を担ってきた世代から、  
新しい令和の時代を描く世代へ。

本当の豊かさをつくりだし、  
そして守っていけるように、  
ここで受け継がれてきた志を伝えたい。

あらためて!

# 宣誓



気骨あふれる土佐人たちの中に、  
次代を担う若き高知人の真剣なまなざしに、  
変わらずあるもの。

とさぶしは、高知の再発見、

新発見ができる文化広報を目指し続けます。

二〇二五年三月三十一日 とさぶし編集部

とさぶし

あらためて!  
高知の文化に  
message!

とさぶしの第50号発刊を  
お喜び申し上げます。とて  
もすばらしいですね!

ぼくにとってとさぶしは、  
高知の仲良しの友人のよう  
なメディアです。友人からの  
情報やアドバイスを、思いやり  
にあふれる言葉で、すとな  
と心に落ちるし、いつまでも  
覚えていきますよね。気づか  
ないうちに自分をかたちづ  
くってくれる存在でもあり  
ます。高知という、美しくて  
優しく、パワフルなローカ  
ルのこと、これからも柔らか  
く教えてください。高知の  
ことが身近になる、とさぶし  
が大好きです!



とさぶし初代編集委員  
ソトコト編集長  
さしでかずまさ  
指出一正さん

つないでつむいで

# 県史編さん室

高知県史(自治体史)とは？

高知県について伝え残されたさまざまな資料を調査し、県の歴史を詳細に記したものを、郷土の歴史を知る、大切な手がかりだ。



3D技術により  
明らかとなった山城の姿

過去を未来に  
引き継ぐための調査を  
行っています！

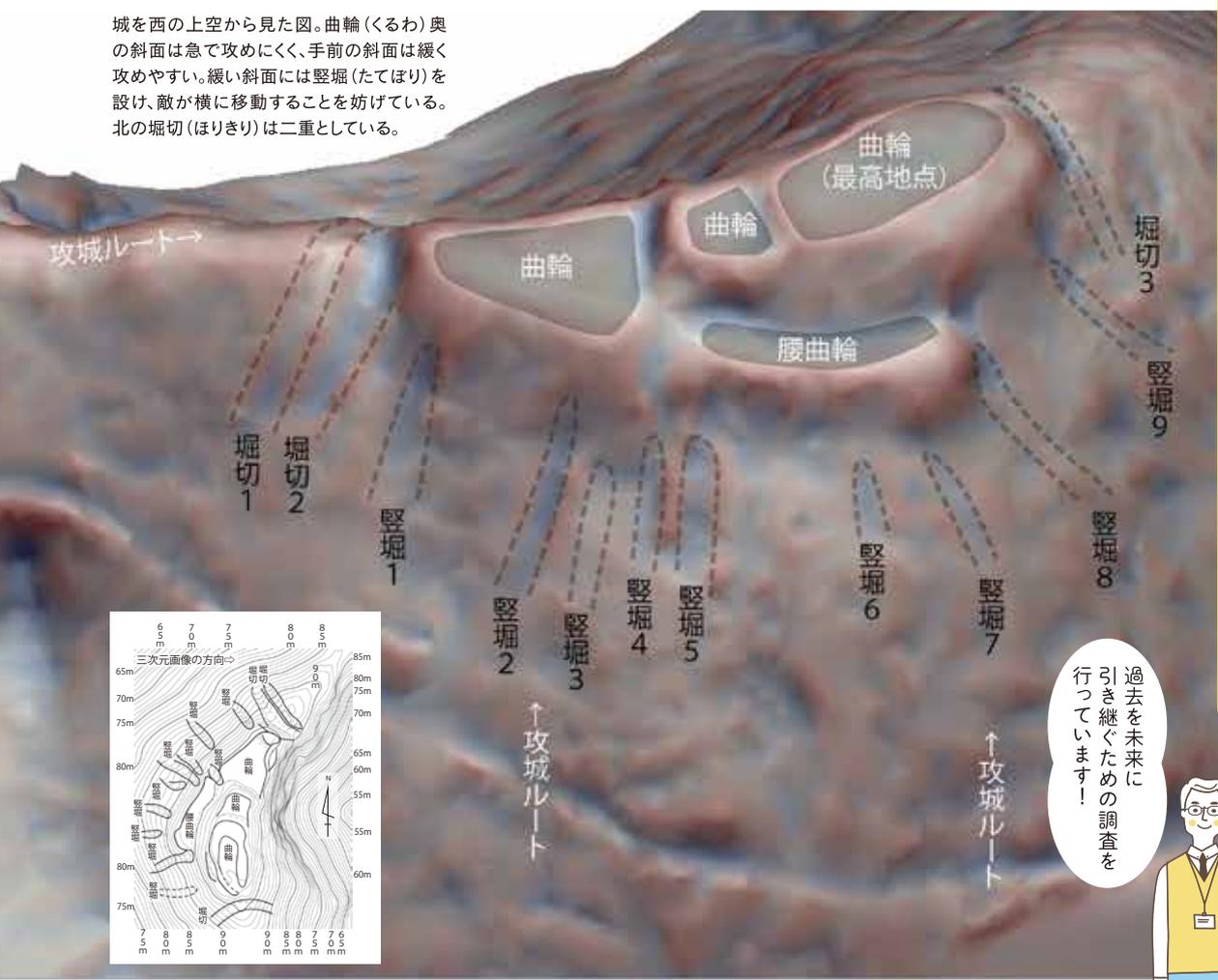
令和6年12月6日。一機のドローンが四万十市川登(かわのぼり)の集落から飛び立った。集落東の山中にある戦国時代の山城「タキモト城跡」を測量するためである。

「タキモト城跡」は幡多地域を治めた土佐一條氏の家臣である式地氏(しきじし)の城である。その防御施設の解明と、城を三次元画像として記録することを目的に、測量を行った。

その結果、敵の攻城に備え「曲輪(くるわ)」「等の立てこもるための施設や、尾根を伝って攻められるのを防ぐ3つの「堀切(ほりきり)」のほか、「堅堀(たてぼり)」という緩斜面を攻め上ることを難しくさせる施設があったことが分かった。

三次元測量技術を活用することで、現地に行けなくてもそれらを立体的視することができ、県史編さん事業では、様々な遺跡の三次元化に取り組む計画である。

城を西の上空から見た図。曲輪(くるわ)奥の斜面は急で攻めにくく、手前の斜面は緩く攻めやすい。緩い斜面には堅堀(たてぼり)を設け、敵が横に移動することを妨げている。北の堀切(ほりきり)は二重としている。



## デジタル活用で 歴史を記述

ドローン以外にも県史編さんでは、多くのものが飛びかっている。それは情報だ。

県史の編さんでは、膨大な量の歴史資料を画像データで収集しており、その中から各時代・分野の専門部会委員によって、資料編や本編に掲載する資料を選ぶ必要がある。

これまでの自治体史では、写真帳と呼ばれる資料の写真を印刷したものを一枚ずつチェックしていたが、県史の委員は日本各地から集められており、何十万枚もある撮影したデータをどう共有するか、県史の編さん作業を進める上で、課題となっていた。

それを解決してくれたのが、インターネット上でのデータ共有(クラウド)サービス。クラウドを使うことで、自宅や研究室のパソコンから、アップされた写真をチェックしたり、委員や事務局が作成した資料目録などの情報共有がリアルタイムでできるようになった。

今この時も、デジタル技術を活用することで、県史の編さんは進んでいる。



### 第12回 東洋町野根

## 史料が語るもの語

昭和50(1975)年3月に刊行された『高知県史 近世史料編』(以下、旧『史料編』)は、2段組みで1,465ページに及ぶ膨大な史料を収載しているが、それらは全て東洋町野根に伝えられてきた「北川家文書」と呼ばれる史料で構成されている。



文書を取り出し、1点ずつ読んでいく



土蔵内の箱に入った文書を確認する

北川家は江戸時代に安芸郡東部の野根郷(のねこう)で惣老(そつとしより)を務め、近代には郵便局長や学校長を輩出した名望家である。近世・近代の史料が多く残されているため、前回の県史編さん事業でも近世史料の大規模な調査を行った。そのうち、旧『史料編』には約1,000点の史料を収載することができたが、全体から見ればごく一部であり、改めて調査を実施することとなった。

令和6(2024)年12月2日、土蔵から文書が納められた箱を運び出し、内容を確認する予備調査を行った。江戸時代後期の文書が多く、野根郷における土地開発や諸産業の有り様、土佐藩の地方支配や交通、海防などの様子が分かる史料とともに、これまで未調査であった近代史資料の概要を把握した。

今回の県史編さんでは、「北川家文書」を借り受けてデジタル画像の撮影を行い、近代の史資料を含めて調査を進め、新たな歴史を紡ぎ出していく。

県史編さん事業と「北川家文書」

高知県の  
歴史に触れる

## 県史特集

# 地域の歴史と 学校の先生

今回のテーマは、地域に残る歴史資料の継承と  
地元の学校で社会科教育を担う先生とのつながり。  
人口減少や学校の統廃合が進む昨今、  
地域の資料と先生との結びつきが重要になっている。

県史編さん室で学生たちと古文書の保存活動に取り組む望月さん(左)。古くずし字を読み解いていくことは、難解かつ膨大な作業だが、それに取り組む学生にとって、「生きた歴史」に触れる大切な機会になっている。



### 失われゆく 地域の歴史資料 その継承の試み

高知大学の教育学部で、社会科の先生になることを目指す学生たちを指導している望月さん。自身も社会科教員の免許を持つ一方で、江戸時代の歴史研究者としても活動。実際の古文書に当たることを何より重視しながら、そこに記されている当時の人々の暮らしや社会の移り変わりを見つめてきた。高知県史の編さん事業では近世部会の委員を務めている。市民団体「高知地域資料保存ネットワーク」のメンバーとしても、地域に残された資料を散逸から守る活動に日々取り組んでいる。

そんな望月さんが自身の経験を振り返って話すのは、「地元の歴史資料を後世に伝えていくことと、学校の先生を育てることに、実は大切な結びつきがある」ということだ。地域から住民が減り、その地域の歴史を伝える資料もまた失われることが危惧される中で、歴史を学ぶ学生たちが古文書に触れる意義や、未来の先生たちにこれから地域で果たしてもらいたい役割について、望月さんの思いを伺った。

**地域の古文書の散逸や  
学校資料の廃棄が  
迫り来る中で**

「学校資料の廃棄の問題が、ここ10年ほどで全国的に議論されている」と望月さん。少子化で各地の学校の統廃合が進められる昨今、校舎に保存されてきたさまざまな資料もまた、廃校とともに廃棄されているという。「当時の子どもたちが書いた文集だとか、地域と関わり

りがあるプリント類の中には、かつてあった出来事を記録して、地元の歴史を物語るものもある。ただ、その価値を判断できる人が地域から減っている」。かつての庄屋や地主などの家に残された古文書なども事情は同じだ。「巨大地震などが起こると、建物と一緒に地域の貴重な資料が散逸してしまう心配もあります。資料の価値を見抜き、その大切さを伝えられる人が各地に必要なんです」。



県史編さんの取り組みには、歴史の価値を知り、それを発信できる人材を育てるという目的もある。

### 学校の先生は 地元の歴史と誇りの 確かな守り手に

望月さんは、学生たちとともに県史編さん室を訪れ、古文書の解説や写真撮影などの保存活動を学ぶ演習も行っている。「将来先生になったとき、目の前で今にも捨てられようとしている貴重な資料があったら、『こういった価値がある』と保存を呼びかけてほしい」と思いうからだ。また、100年も



望月さんが携わった資料の保存活動の記録(上)。昭和の頃は、地元の貴重な古文書があると学校の先生が所有者から話を聞くなど、調査に努めていたという。

200年も昔の古文書に触れる体験は、歴史や歴史学の成り立ちを目の前で学ぶ機会にもなる。「多様な考え方があふれる現代だからこそ、しっかりと根拠を持って教育に携われる教師になつてほしい。古文書はまさにその時代を知る生の資料です。それらを読み解く作業はとも手間がかかりますが、だからこそ、物事の根本にまで粘り強さかのぼれる力が養われるんです」。



学生たちは全員、古文書に触るのが初めて。江戸時代から受け継がれてきた本物の文書を前に、「(触るのが)怖い」と言いながら、丁寧な手つきで開いていた。

昭和56年、山梨県生まれ。専門は江戸時代の社会史など。岐阜市歴史博物館などで学芸員を務めた後、平成30年に高知大学に赴任。教員養成の講義を担う傍ら、「高知地域資料保存ネットワーク」では副会長を務める。

もちづき よしちか  
**望月良親さん**

# バケモノハイム

特別編

其の四



AM3:00

さらやしき  
血屋敷

80%



日本各地に残る怪談話  
西土佐でも語り継がれる  
お菊の伝説

女の亡霊が夜な夜な「1枚…、2枚…、3枚…」と皿を数える怪談話「血屋敷(さらやしき)」。日本各地に似た話があり、四万十市西土佐奥屋内(おくやな)にも伝説が残っている。

約300年前、伊予松山藩の武家に育ったお菊は、お家騒動を逃れて夫と共に黒尊川(くろそんがわ)沿いの集落奥屋内にたどり着いた。しかし夫は病気にかかってしまい、お菊は庄屋の奉公を始めることに。その庄屋の甥であった鉄三郎がお菊の美しさに惚れ込んだが、拒否されたことに腹を立て、家宝の皿10枚のうち1枚を隠してお菊に責任をなすりつけた。無実の罪で責め立てられたお菊は、ある晩それを苦に、滝へ身を投げて命を絶つてしまう…。

現在もこの滝は実在しており「お菊の滝」と呼ばれていて、滝へ向かう道端にはお菊をイメージした像が集落を見守るように立っている。お菊の無念の思いが晴らされていますように…。

# 贈り物

とさぶしからの

土佐三原とぶろく合同会社 P14, 15  
**冷凍の甘酒150g 3種セット 3名様**

とぶろく用の米麴を使用した、コクがあってスッキリとした味わいの甘酒。プレーン、ユズ、ショウガの3種をセットにしてお届け♪



やまびこカフェ P14, 15  
**700円分のお食事券 3名様**

地元のお母さんたちが考案する日替わりのメニューが人気のやまびこカフェ。野菜たっぷりボリューム満点の定食をお楽しみに!



P14, 15

岩崎製茶 3名様

**茶葉3点セット(玄米茶、煎茶、ほうじ茶)**

三原村のおいしい空気と太陽の恵みを浴び、天然のミネラルと旨みがギュッとつままった茶葉。爽やかな味わいと香りの良さを楽しんで。

**QUOカードPay1000円分 10名様**

※こちらの商品をご希望の方は、応募時にスマホで受信できるメールアドレスを記載してください

※QRコードが読み込めない場合はLINEアプリから友だち登録していただき、ご応募ください。

とさぶし



**応募締切 / 令和7年6月20日**

**クイズとアンケートに答えて読者プレゼントに応募しよう!**

**クイズ**

とさぶしの創刊は平成何年?

- 1 スマホから右のQRコードを読み込んでwebサイトにアクセス
- 2 応募フォームより必要事項を明記し、読者プレゼントに応募する

※読者プレゼントの応募は「とさぶしwebサイト」もしくは、官製ハガキから応募できます。官製ハガキで応募される場合は①年代②性別③お住まいの都道府県④とさぶしを手に入れた場所⑤とさぶしを知ったきっかけ⑥良かったコーナー(複数回答可)⑦満足度(10段階評価でお願いします)⑧とさぶしを読んで実際に行ってみたい、食べてみたいなど意識変化はありましたか?(はい/いいえ)⑨「はい」の方。その理由を教えてください⑩とさぶしを読んで、実際に冊子掲載店や場所に行ってみたり、商品を購入してみたりしましたか?(はい/いいえ)⑪クイズの答え⑫希望する商品⑬氏名⑭発送先のご住所⑮電話番号⑯メールアドレス(※デジタルギフトご希望の場合)⑰はみだしコラム(※)をご記入の上、下記の宛先まで締切日(令和7年6月20日)必着でお送りください。〒781-0081 高知市北川添10-15 株式会社ほっとこうち

●読者プレゼントの応募は、1人1回とさせていただきます。 ●プレゼントの発表は、商品の発送をもって代えさせていただきます。 ●いただきました個人情報はプレゼントの発送にのみ使用します。 ※とさぶし第48号より、各ページ下にコラムの掲載を始めました(今回応募していただいたコラムは第51号に掲載予定です)。とさぶしに関する「感想」や、次回の特集テーマである「道の駅」にまつわるエピソードなど(30文字程度)をお寄せください。掲載は抽選となります。(例)毎号楽しく読んでいます。高知のお酒文化をもっと知りたい!(高知県・30代)



# とさぶし

A BRAND NEW CHAPTER @KOCHI  
TOSABUSHI

<https://tosabushi.com>

発行  
高知県文化生活部文化国際課

〒780-8570 高知県丸ノ内1丁目2番20号(本庁舎5階)

Tel 088-823-9793 Fax 088-823-9296

E-mail 140201@ken.pref.kochi.lg.jp

発行日:令和7年3月31日(季刊)

企画 とさぶし編集委員会

制作 ほっとこうち

バックナンバーの入手方法・お問い合わせ

高知県文化生活部文化国際課(上記)まで  
ご連絡ください。

web  
リニューアル!  
見てちや!

## 特集

- P02 第50号記念 **これからも、とさぶし!**
- P03 とさぶしのあゆみ
- P04 とさぶし体験
- P07 わたしととさぶし①
- P08 話題になったとさぶしのアレ、いまだどうなっちゃう?!
- P13 わたしととさぶし②
- P14 三原村を再発見!新発見!
- P16 復活!プライムトーク
- P18 わたしととさぶし③
- P20 <新連載>さっとはじまる とさではじめる
- P21 あらためて!宣誓とさぶし

## 連載

- P22 つないでつむいで 県史編さん室
- P24 県史特集【地域の歴史と学校の先生】
- P26 バケペディア -特別編-[皿屋敷]

Facebook、LINE、Instagramでも情報配信中!



Facebook



LINE



Instagram